

# 薬草園の花だより

第6号

2017年(平成29年)11月19日発行

## ■ 第6号に寄せて

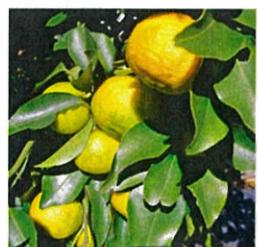
秋も深まり、朝夕は寒さを感じる日も多くなってきました。キャンパス内のイチョウもすっかり黄葉となり、葉を散らし始めています。薬用植物園の植物たちもすっかり晩秋の装いです。この時期、花がめっきり少なくなっていましたが、目をこらせば、まだ見つけられます。また、種々の果実が実っているのも見られます。カリンやユズやキンカンなどの柑橘類がたくさんの実をつけています。

今月に入り、短い期間ですがサフラン（アヤメ科）の花を楽しむことができました。前号で

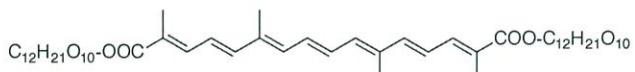
はイヌサフラン（コルチカム／イヌサフラン科）の花を紹介しましたが、私はアヤメ科のサフランの花の色が大好きです。サフランはパッと咲いた後、途端に咲きすぎとなってしまい、花の形もなんとなくだらしなくなります。そのためかクロカスと同じ仲間（属）なのに、園芸植物としては春咲きのクロカスのような人気が出ません。サフランの赤～朱色の雌しべは生薬のサフランとして用いられますが、その色素はクロシンです。クロシンはクチナシ（アカネ科）の果実の色素成分でもあります。現在、園内におけるサフランの花の見ごろは終わってしまいましたが、終わりに近かった時に撮った写真を示します。やはりサフランは開きすぎより、咲きかけの頃がよろしいようです。（船山）



サフラン



ユズ



クロシン

## ■ 今咲いています・見頃です

### 《アスターとクリサンセマム》

かつて、まだ学部学生だった頃、卒論実験の合間に学内の薬用植物園で草ひき（雑草取り）をしていた時、生薬学教室の竹本常松教授（当時）が草ひきに来られ、話しかけられました。「君ね、将来、キク科の植物成分の研究をしてみてはどうかね。

キク科の植物は2万種類あるから、論文2万報書けるよ」。確かに、キク科には多くの植物が属しており、1620属、23600種類もの植物があるといいます。

わが国にてよく見られるいわゆる野菊の仲間の多くはアスター属の植物ですが、菊花展などで見られる大菊や切り花にする小菊、「もってのほか」などの食用菊はクリサンセマム属の植物です。これらのクリサンセマム属のキク類は奈良時代～平安時代初期の遣唐使により不老長寿の薬として中国大陆からわが国にもたらされました。めっきり花の少なくなった園内にてはキクたちが競って花を咲かせています。是非、見にいらしてください。



アスター（ノコンギク）



クリサンセマム

### 《ローズマリー》

薬用植物園の温室の東側にてローズマリーがひっそりと小さな花をつけています。葉の香りを楽しむとともに花も愛でてください。薬用植物園ではローズマリーやセージ、ミント類などのいわゆるハーブ類も多種栽培しています。それにしても、人類は実に多彩なスパイス（香辛料）やハーブ類を見い出し、私たちの食卓を豊かなものにしてきたものと思います。もし、これらのスパイスやハーブ類がなければ、食卓は味気ないものになったことでしょう。料理の味付けの基本はさしすせそ（砂糖・塩・酢・醤油・味噌）、中でも私たちにとって醤油や味噌は独



ローズマリー

特の大切な調味料ですが、ハーブ類や、コショウや七味唐辛子、わさび、和芥子、山椒など、食をそそらせるスパイス類のありがたさもしみじみと感じます。

## ■他にもこんな植物が

### 《トウガラシ》

私たちはトウガラシやコショウを毎日のように使いますが、どちらが先にわが国に伝わったと思いますか。実はコショウの方がはるかに古く、トウガラシよりも800年も早く伝来しているのです。奈良東大寺の正倉院にはいわゆる「正倉院薬物」と称される生薬類が納められています。そして、「種々薬帳」という756年(天平勝宝八歳)の年号の入ったリストに60種の生薬が挙げられていて、そのうち38種が現存、そのうちのひとつがコショウ(胡椒)なのです。それに対して、トウガラシの方は南蛮貿易によって16世紀にわが国にもたらされたものですからその伝来はずっと遅れているということになります。トウガラシは漢字では唐辛子と書きますので、唐から伝わったのではと思われるかもしれませんか、そうではないのです。



トウガラシ

また、現在、韓国のキムチにトウガラシはつきものですが、トウガラシを韓国に伝えたのは朝鮮半島に攻め入ったわが国の豊臣秀吉軍であったといわれます。それ以前のキムチはトウガラシの入らない白菜漬けでした。豊臣秀吉の軍隊はトウガラシを凍傷予防や目潰し(毒薬として)のために持ち込んだとか。そのため、韓国では、トウガラシのことを「倭(わ)ガラシ」とも言います。そして、さらに、中国にトウガラシが伝わったのはその後のことでした。以上の事情から、中国で1596年(明時代)に上梓された李時珍の『本草綱目』にはトウガラシの記載がありません。

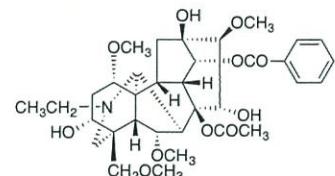
### 《トリカブト》

白花を咲かせるトリカブト(オクトリカブト)の塊茎5球を手に入れ園内に植えてもらいました。来年は珍しい白花のトリカブトの開花を薬用植物園にて見られると思います。トリカブトの名前はその花の形が、舞楽において、楽人・舞手が被る被り物(これを鳥兜という)に似ていることから名付けられたものです。この仲間の植物は全世界に500種以上あり、同じような発想で、ヨーロッパでは、トリカブトを“monkshood”(修道士の頭巾)と言います。



トリカブトの塊茎

トリカブトは毒草として知られていますが、その塊茎は親(今年芽を出した塊茎)を鳥頭、親からストロンを出して新たに出来た塊茎を附子と称し、漢方の要薬です。ただし、現在使われているのは修治を施し、弱毒化したものであり、素人が扱える生薬ではありません。その有毒主成分はアコニチン類で、アルカロイドの一種です。あるホームセンターにてトリカブトの苗が販売されており、そこに「トリカブトの毒は根にだけあります」と書いてありますが、これは嘘です。トリカブトの有毒成分は全草に含まれています。そのため、山菜と間違ってトリカブトの地上部を食べて中毒してしまう事故が毎年のように発生しているのです。



アコニチン

## ■薬用植物園からのお知らせ

### 《日本薬史学会2017年会(埼玉)開催ご協力の御礼とトートバッグについて》

日本薬史学会2017年会(埼玉)が10月28日(土)、本学にて開催され(年会長／船山)、おかげさまにて盛況裏に幕を閉じることができました。皆様には種々の御協力をたまわり厚く御礼申し上げます。あいにくの天気にもかかわらず、薬用植物園に足を運んでくださった方も多くいらっしゃったようです。なお、この学会用に多めに用意したトートバッグが若干残りました。ノートパソコンや原稿を運ぶのにちょうど良い大きさ(A4マチ無し／濃紺色)です。漢方資料館の入り口に置きますので、使っていただける方(お一人様一枚にお願いします)、御自由にお持ち帰りください。

発行：日本薬科大学薬用植物園運営委員会  
委員長(薬用植物園長)／船山信次  
副委員長／山路誠一  
委員(教員)／野口博司、西川由浩  
新井一郎・糸数七重  
委員(事務)／今村隆・笹井彰・鈴鹿和子  
土屋翔太郎・天野崇教・黒木重夫